

論文の和文要旨

論文題目	初対面雑談会話における日本語母語話者及び非母語話者の 話題導入と話題展開 —接触経験を通じた変化を探る—
氏名	嶋原耕一

法務省の統計によると、日本国内の在留外国人は、平成 27 年度末の時点で約 223 万人に上り、日本の総人口の 1.76% を占める（法務省）。そして日本国内の少子高齢化や企業のグローバル化等により、この数字は今後さらに増えると予想される。しかし日本国内の在留外国人の増加と同時に、両者のコミュニケーションにおける誤解や衝突の問題、また日本語母語話者（以下、母語話者）と日本語非母語話者（以下、非母語話者）が良好な関係を形成することができないという問題も、多く報告されている。そんな中、岡崎敏雄（1994）は母語話者と非母語話者の共生を可能にするための枠組みとして、接触場面における協働（collaboration）を提示している。本研究では、接触場面における協働に広く関わると考えられる、話題に注目する。どのような話題をどのように導入するのか、またどのような話題をどのように展開するのかという観点から、接触場面の会話を分析する。両者による「話したい気持ちはあるけど、何を話せばいいのか分からない。」という声を受けて、分析対象としては、初対面雑談会話を用いることとする。初対面雑談会話では、どのような話題を選択し導入するか、またそれらの話題をどのように展開していくかが、話者に任せられているからである。そして話題導入及び話題展開という観点から、母語話者と非母語話者の協働を明らかにし、それをどのように学習しているのか明らかにすることを目的とする。

本研究の第 1 章には、上記の研究目的がその背景とともに、記されている。続いて第 2 章には、国内日本語教育が辿ったパラダイムとともに、各パラダ

イムで重視されていた能力、さらに本研究と関連深い先行研究がまとめられている。また、本研究で注目する話題導入及び話題展開に関する先行研究も、ここでまとめた。その上で先行研究における、本研究の位置づけを明確にした。

第3章では、談話分析に先立つ予備調査として、インタビューを実施した。話題導入及び話題展開に関する協働については、母語話者及び非母語話者がそれをどのように学習していくのか、これまで明らかにした研究は見当たらない。話題導入及び話題展開と深く関係する社会言語能力の習得については、先行研究が、明示的教育とインターアクションの経験を、その習得要因として挙げている。予備調査では、その主張を確認すること、そしてその他の要因の有無を探ることを、目的とした。母語話者と非母語話者8名ずつに対して、半構造化インタビューを実施し、これまでの経験を語ってもらった。結果として、母語話者と非母語話者の両者が、話題の選択と話題の発展に関して、様々な意識を持っていることが分かった。そしてそれらの意識を持つようになったきっかけ、変化するようになったきっかけとして、接触場面に参加した経験と日本語教育の経験が提示された。

第4章には研究方法について、その協力者の統制、データ収集、分析方法を詳細に記した。本研究では母語話者と非母語話者を、お互いの接触経験の多寡によって統制した。分析対象とした会話データは、母語話者同士(母語場面)、接触経験の多い母語話者と多い非母語話者(接触場面A)、接触経験の多い母語話者と少ない非母語話者(接触場面B)、接触経験の少ない母語話者と多い非母語話者(接触場面C)、接触経験の少ない母語話者と少ない非母語話者(接触場面D)の5種類であり、各8会話ずつ、計40会話を対象とした。分析項目は、話題導入の言語形式、話題導入の内容、話題展開における参加形式、話題展開における話者間の関係性の四つである。

第5章の第1節は、話題導入の言語形式についての分析である。まず結果として、母語話者に協同的転換が多く、接触経験の多い非母語話者に一方的転換が多く、接触経験の少ない非母語話者に突発的転換が多いことが明らかとなった。ここから、非母語話者が母語話者との接触経験を通し、突発的転換が唐突な印象につながる危険性に気付き、それを避けるようになっているという仮説を立てることができるだろう。そして量的分析の結果を基に、終了表現も開始表現もない話題転換がどのようなものか、話者間で比較することもできた。

それによって、母語話者及び接触経験の多い非母語話者が特定の文脈でしかそのような話題転換をしないのに対し、接触経験の少ない非母語話者は、危険と思われるような文脈でもそれを生じさせていることが明らかになった。フォローアップ・インタビューでは、一つ一つの話題転換表現の使用について、母語話者からも非母語話者からも、何か明確な意識が語られることはなかった。それは会話中、話者が意識することなくそれらの表現を用いていることを意味すると、考えられる。ただ、上記のように唐突な話題転換も多く見られた話者については、話題転換表現の使用を意識することも、必要だろう。また接触経験の少ない非母語話者からは、次節でも見ていくように、「初対面会話でどのような話題を出せばいいかわからない」という旨の語りが多く聞かれた。そのような悩みを持っていた話者は、導入する話題の内容に多くの意識を向けていたと考えられるため、その言語形式に注意を払う余裕がなかった可能性も、指摘できた。

第5章の第2節は、話題導入の内容についての分析である。本節の主な結果として、まず接触経験の多い母語話者が、そもそも「国事情・言語」話題に興味を持っているために、これまで接触経験を積んできた可能性が示唆された。また接触経験の多い母語話者が、自らの興味に加えて、「話しやすいかな、なんか答えられるかな」という非母語話者への配慮のために、「国事情・言語」話題を導入することがあることも、明らかになった。

一方の非母語話者については、接触経験の少ない者が「国事情・言語」話題を導入することが多く、接触経験の多い者が「大学生活」話題を導入することが多かった。「国事情・言語」話題についてはフォローアップ・インタビューから、接触経験の少ない非母語話者が「前から日本人に聞いてみたかったから」という理由で、当該話題を導入することがあることが明らかになった。このような「これまで話題にする機会がなかったから話題にする」「話題にしたことがあるからこれ以上話題にしない」という興味の移り変わりは、言語習得と区別しながら、話題に影響する要因として今後も注目していく必要がある。また「国事情・言語」話題が、プライバシーへの踏み込みを回避するために、接触経験の少ない非母語話者により導入されることがあることも、示唆された。さらに「自分が言えることが多くなる」という理由から、特定の話題を導入することも明らかになり、非母語話者の話題に関する得手不得手の意識が話題導入に影響することも、示唆された。さらに習得については、どのような話題が失礼になるか、どのような話題を導入しながら共通点を探っていけばいいか、な

どについて非母語話者が接触経験を通して習得を進めている可能性を、指摘することができた。

第6章の第1節は、話題展開における参加形式についての分析である。参加形式のコーディングにより見えた会話全体の傾向としては、母語話者と非母語話者に関わらず、接触経験の少ない話者が単独で話し手となることが多かった。そして、両者の接触経験が多い接触場面 A では両者が話し手となることが、両者の接触経験が少ない接触場面 D では母語話者のみが話し手となることが、多かった。母語場面の結果は、接触場面 A と同様、両者が話し手となることが最も多かった。両者がそれぞれの話題に話し手として、対称的に参加することは、話者間の距離の短縮という観点から、有効だと考えられる。また接触場面 A からは、当該話題に関する知識の少ない母語話者が、関連するエピソードを紹介し話し手となることで、両者の参加形式を対称的にする例も提示した。一方で、非対称的な参加形式が見られた会話、つまりどちらかが単独の話し手となることが多かった会話では、相手の意見を引き出すことや、相手を話し手としてその話題に巻き込むことができていないことが、その非対称性の要因として考えられる。話題展開において相手に質問することが難しかった理由としては、接触経験の少ない非母語話者の「失礼にならないように」という意識が指摘された。さらに失礼さに関わる意識ではなく、日本語の問題で質問することができなかったという旨の語りも、同じく接触経験の少ない非母語話者からは聞くことができた。話し手と聞き手のどちらとして話題に参加するのということには、個人のスタイルも大きく関わる。ただ、両者が聞き手として参加することは双方向的な自己開示にもつながりやすく、初対面会話において話者間の心的距離を短縮するのに、重要であると考えられる。そのため、非母語話者が聞き手として質問することが「難しい」と感じているならば、それを解消するような方法を、日本語教育の枠組みから考えていくべきだろう。また、母語話者による積極的な質問により非母語話者が質問できていないのであれば、質問しやすい雰囲気を作ったりすることが、母語話者からの歩み寄りとして有効かもしれない。質問することは話題の展開を決めることにもなるので、非母語話者もそれができるといえる。

第6章の第2節は、話題展開における話者間の関係性式についての分析である主な結果としては、母語場面と接触場面 A では同質の関係性が強調されることが多かった。接触場面 B 及び接触場面 C では、それぞれ接触経験の多

い母語話者と非母語話者により、話題展開の中で共通点が指摘される様子が観察され、同質の関係性が強調されていたと考えられた。ただ一方で、両場面における接触経験の少ない母語話者及び非母語話者は、非対称的な関係を想定していると考えられた。接触経験の少ない者同士の接触場面 D では、非対称的な関係が想定され、話題展開を通して強調されることが、特徴的に観察された。ただ先にも述べたとおり、本節の結果は質的分析による結果であるため、決して一般化することはできない。また話者間の関係性の強調には、各話者群内の個人差や、二者間の相性も大きく影響するだろう。上記のような特徴的な談話例は観察されたものの、これからも分析対象を増やしながらか、慎重に検討していく必要がある。

第 7 章では、本研究で見られた分析結果を、協働の観点から見直すことで、両者にどのような協働が見られたのか明らかにした。さらにそれらを用いて、どのように異なるの内在的統合を実現することができるのかについても、議論した。

最後に第 8 章で本研究の課題をまとめ、今後必要な研究を提示することで本論文を終えた。